



茶文化の思想的背景に関する研究

藤, 軍

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1993-09-30

(Date of Publication)

2015-05-26

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲1234

(JaLDOI)

<https://doi.org/10.11501/3078362>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001234>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	藤 軍 (中国)
博士の専攻分野の名称	博士(学術)
学位記番号	博い第217号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与の日付	平成5年9月30日
学位論文題目	茶文化の思想的背景に関する研究
審査委員	主査 教授 山田敬三 教授 堀信夫 教授 倉沢行洋 教授 寛久美子 教授 池上洵一

論文内容の要旨

本論文は、ごく一般的な植物である茶が、高度な精神文化へと成長した思想的背景を考察したものである。前後二篇に分かれ、前篇を構成する第一～第四章においては、茶が植物から飲み物になっていく過程に養生思想、特にそれに属する本草学が如何に関わったかを論じ、後篇を構成する第五～第七章では、茶が飲み物から精神文化になっていく過程で、神仙思想、特にそれに属する金丹説が如何に関わったかを論じる。四百字詰原稿用紙に換算して約620枚である。

以下、各章ごとにその要旨を述べる。

前篇 茶と養生思想・本草学—「植物」から「飲み物」まで

第一章 古代中国人の宇宙観と茶の存在位置

中国の古代哲学では、人間を含む万物の根源は「気」にあるとされていた。この思想を承けて、医学においては生命の営みは陰陽五行の循環によるとみなし、養生学においては病気の原因は陰陽の不調にあると考え、本草学においては、自然界に存在するあらゆる植物は、自然界の「正気」によって人体の「病気」を調える薬であるとしていた。茶はこのような思想を背景として飲み物となったのである。まず、茶の気味は寒・苦で、その薬勢は沈・降であるので、人体に多発する火熱病や上逆の病気に特に効き目があるとされた。また、茶は無毒で老若男女、春夏秋冬を問わず常に飲用できるものと認められた。要するに、茶は中国の哲学・医学・養生学・本草学の思想的背景のもとで、日常の飲み物の王座へと上って行ったのである。

第二章 固形茶から散形茶へと変化する原因について

元末頃より、茶の主流が蒸し茶から炒め散形茶に変わった。それは蒙古族の支配者による漢文化への「蹂躪と征服」の結果であると、日本の研究者は考えがちであったが、これは正しくない。固形茶の「茶餅」は、陸羽の『茶経』が著される以前から他の薬餅と同様に、一種の家庭用常備薬として製

造されていた。『茶経』が世に出て、茶の飲み物としての地位が固められてからも、蒸し固形茶の青臭さと製造・飲用の手続きの繁雑さは常に改革的とされていた。この問題を一挙に解決して飲茶の新しい時代をもたらしたのが炒め散形茶の出現であった。それ故、固形茶から散形茶への変化は、薬用から飲用へと移行する茶の利用史上における必然的な結果であった。

第三章 『茶経』研究における諸問題について

従来、日本での『茶経』研究は、日本茶道の諸般の源を『茶経』に求めようとする発想に災いされて、『茶経』本文の解釈を誤る場合があった。「儉」を「わび」の根源とみなしたのはその一例である。本論文は、本草学の立場から「儉」の意味を再検討し、陸羽の茶の精神を最もよく表しているとされる「為飲最宜精行儉徳之人」に対しても新しい解釈を施した。また、『茶経』第一章「一之源」が、本草学の考え方と本草書の書式に強く影響されたものであることを明らかにした。更に、陸羽の風炉に刻まれた「伊公羹陸氏茶」の六文字について、これは陸羽が、他の薬草を配合しない茶一味の飲用を確立したことを伊尹の羹の発明に比肩する功績として誇ろうとしたものである、という新説を提起した。

第四章 『喫茶養生記』と宋代飲茶

日本での最初の茶書である『喫茶養生記』は、上巻は茶、下巻は桑を主題としている。これまでの研究においては、桑が茶と同等の重みで扱われている理由をはかりかね、下巻の存在理由を矮小化したり、排除したりする傾きがあった。本論文は、『喫茶養生記』が茶書であると同時に医学書ないし本草書であることを指摘し、茶と桑は、一方は病氣予防の役割を担い、他方は病氣治療の役割を担うことによって、相互に補足し合うものであることを明らかにし、『喫茶養生記』で桑が重く扱われている理由をはっきりさせた。また、『喫茶養生記』の伝授によって普及したとされる点茶法は、実は粉茶の「点服」法に由来するものであることを明らかにした。

後篇 茶と神仙・金丹説—「飲み物」から「精神文化」まで

第五章 茶と仙茶

茶を精神文化にまで昇格させるのに与って力があったのは、神仙思想なканずく金丹説であった。神仙思想家は、金丹服用による永遠の生を説いたが、永生はいっこう実現しないのみならず、金丹服用によって死ぬ者が続出した。そこで、神仙思想家は金丹大薬製造・服用の事前準備として、草木類に属する小薬を飲むべきことを主張し、金丹説の破綻を養生思想によって繕おうとした。なかでも、優れた薬性をもつ茶は特に重んじられ、ここにおいて茶は仙薬の地位を獲得することになった。よい茶が、他のいわゆる仙薬と同じく高い山に産すること、固形茶飲用のさいの、砕く、碾く、煎じるなどの手続きが金丹服用の手順と共通していることも、茶の仙薬化に拍車をかけた。

第六章 茶と芸

茶が仙薬は見なされて丁重に扱われるようになったことが、茶技・茶芸形成の重要な素因となった。初期の茶技は、まず茶の薬効の保全を求めるものであった。『茶経』が、茶の薬効・神霊は茶の泡に秘められているとして「育華」（泡を育てる）なる茶技を説いて以来、元末まで中国の茶技は泡をめぐる展開した。茶の泡は形状によって沫・餽・花・乳などと呼び分けられ、遂には泡の量、そ

れが消失するまでの時間、形状の面白さなどを競う「闘茶」にまで至った。このような茶技に芸術的要素が加味されて茶芸が成立したのは、茶文化の「共飲性」と「空閑性」によるところが大きい。

「共飲性」によって点茶は客の前で行なわれるようになり、点茶動作の芸術化が促され、「空閑性」によって、飲茶の時間に心身のくつろぎが求められ、飲茶時間の芸術化が進んだ。

第七章 中国茶芸の日本伝来

日本茶道は、中国茶芸の諸般を承け継いでいるが、そのことの考察は従来の研究では十分になされておらず、誤りも少なくない。本論文では、日本茶道の点前作法の成立は、中国で神仙思想の影響下に形成されていた茶の神聖的性格に負うところが大きいことを指摘し、併せて、日本での茶の飲用の初期において茶は多く貴人に献じられる飲み物であったことと、点茶に用いる道具が舶来の貴重品であったことが、日本の点前作法に独特の大仰なうやうやしさを強めたことを指摘した。また、日本茶道で用いる諸種の道具の中で特に重視されてきた茶壺による茶の保存法は、日本の茶道関係者のおおかたの常識に反して、その源流が中国にあることを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の特色は、中国古代の「気」の概念、それに基づく養生思想、本草学ならびに神仙思想の角度から、中国・日本の茶文化全体を照射しようとする研究態度・方法にある。茶文化研究は近年とみに盛んで、日本、中国を初めとして他のアジア地域や欧米においても多数の論文はあるが、このような態度・方法による本格的な研究はまだ見られない。このため本論文は、従来見過ごされてきた問題点に初めて光を当て、また従来の研究の誤謬を発見するなど、いくつかの創見を含むものとなり、茶文化研究史としてユニークかつ価値ある論文と評価できるものとなった。

本論文での独創的な学説の主要なものを以下に列挙すれば、

- (1) 中国元時代に、茶の主流が固形から散形に変わったのは、これまでの研究者が主張してきたような、蒙古族の支配による文化的低落のためではなく、茶が薬用から大衆の飲用へと転じていく過程が起こるべくして起こったものであることを明らかにした。
- (2) 『茶経』を本草学の立場から読み直し、近年における中国での『茶経』研究を参照しながら、「儉」の語釈など従来の『茶経』研究の問題点を指摘し、『茶経』本文の新しい読み方を試みた。
- (3) 『喫茶養生記』下巻の主題が桑である的確な理由を、従来の茶文化研究は明かにできなかったが、本論文は本草学の立場から『喫茶養生記』を読み直すことによって、初めてことを明らかにした。
- (4) これまではっきりしていなかった「点茶」の語の意味を解明し、併せて日本茶道の点茶法の由来を解明した。
- (5) 茶が高度な精神文化へと発展していく過程で、神仙思想なканずく金丹説の影響があったことを指摘した。

本論文は上述のように豊かな創意を含み、着想のよさは抜群であるが、中国語文献の日本語訳に一部適切でないところもあり、特に茶詩の文学作品としての読み方には、より一層の細心さが望まれる。だが、得られた成果の大きさからすれば、それはむしろ小さな瑕疵とみなすべきものである。

本論文は、研究態度・方法の斬新さ、着想のよさ、博搜された資料の豊富さに見るべきものがあり、実際の茶道修行に裏付けされた研究であることと相まって、多くの独創的学説を出すことに成功

しており、茶文化研究に新たな一ページを加えたものと評価できる。

以上の審査結果により、当委員会は、論文提出者、藤軍に博士（学術）の学位を授与するのが妥当との結論に達した。